広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第２号　2021　1－8

就職活動に取り組む青年のひきこもり特性とキャリア選択

―生徒・進路指導への示唆―

日原尚吾・岩佐康弘・杉村和美

（2021年10月５日受理）

Hikikomori Traits and Career Choices Among Youth Engaging in a Job Search
―Implications for student counseling and career guidance―

Shogo Hihara, Yasuhiro Iwasa and Kazumi Sugimura

Abstract: Hikikomori—acute and severe social withdrawal, is a mental health problem worldwide. Although previous works have indirectly suggested that youth with high levels of hikikomori traits may have difficulties with various aspects of their career choices, no research has empirically investigated this. We address this gap by examining the associations between hikikomori traits and indicators of career choice (environment- and self-career exploration, outcome expectations, and exploratory career intentions) among Japanese undergraduates. A total of 756 Japanese youth participated in our online survey (79.0% women; M_{age} = 20.9, SD = 0.6). All participants were third-year university students who planned to enter the labor market after graduation. Correlation and path analyses consistently indicate negative associations of hikikomori traits with environment- and self-career exploration, career expectations, and intentions. These results suggest that youth with high levels of hikikomori traits experience difficulties in deciding on careers that are suitable for them in society because they tend to avoid interpersonal relationships and social participation. Based on our findings and results from prior studies, we propose the promotion of healthy identity development as a useful perspective for student counseling and career guidance.

Key words: Hikikomori, Career choice, Youth, Student counseling, Career guidance
キーワード：ひきこもり，キャリア選択，青年，生徒指導，進路指導

問題

社会から撤退するひきこもりは，心理学や精神医学など様々な分野で研究が蓄積されるとともに，教育領域においても現代青年を取り巻く重要な問題とみなされている（内閣府，2020）。ひきこもりは青年期に生じやすく，個人のメンタルヘルスだけでなく，労働力不足などの社会的問題にもつながると想定される（Kato et al., 2019）。近年では，重篤なひきこもりだけでなく，社会からの撤退や孤立などで特徴づけられる，ひきこもり特性を持つ青年にも注目が集まっている（Teo et al., 2018; 渡部・松井・高塚，2010）。先行研究では，ひきこもり特性を持つ青年が，人生の重要な選択に関する自己決定への不安やアイデンティティ発達のつまずきなどの，キャリア選択の困難につながる問題を抱えやすいことが示されてきた（例えば，渡部他，2010）。そのため，ひきこもり特性を持つ青年はキャリア選択の多様な側面で困難を抱えると想定されるが，この関連性を直接的に検討した研究は存在しない。そこで本研究は，ひきこもり特性とキャリア選

択に関する指標（キャリア探索，キャリア期待，キャリア探索意図；Betz & Voyten, 1997; Stumpf, Colarelli, & Hartman, 1983）との関連性を検討する。多くの青年がキャリア選択について意識していると考えられる，就職活動の時期に着目する。

ひきこもり

ひきこもりは，「様々な要因の結果として社会的参加を回避し，原則的には６ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態」と定義される（厚生労働省，2010）。日本の15–39歳の若者のうち１－２％が，この基準を見たすと推計されている（Koyama et al., 2010; 内閣府，2016）。近年では，日本以外のアジアや欧米の国々においてもひきこもりの事例が相次いで確認されており，広く国際的な問題として注目を集めている（例えば，Lee, Lee, Choi, & Choi, 2013; Ovejero, Caro-Cañizares, León-Martínez, & Baca-Garcia, 2014）。

上述したひきこもりの基準を満たさない，比較的軽いひきこもりの症状を示す青年も存在する。ひきこもり支援に関するガイドライン（厚生労働省，2010）では，ひきこもりの事例のほぼ全てが，就学・就労をしながら軽度のひきこもりを示す準備段階を経ると指摘されている。また，ひきこもりの重症度を適切に評価するために，社会的に孤立している状態が３ヵ月以上６ヵ月未満の場合を「前ひきこもり（pre-hikikomori）」とみなす基準も提案されている（Kato, Kanba, & Teo, 2020）。さらに，ひきこもることに対して親和性を示す青年も数多く存在することがわかっている（渡部他，2010）。近年では，以上のように重篤な程度から比較的健常な程度までの幅広いひきこもりを検討するために，個人が持つひきこもり特性を把握する実証的研究が行われはじめている。Teo et al.（2018）は，非社会性（例えば,「人と距離をとる」），孤立（例えば,「自分の部屋に閉じこもる」），情緒的サポートの欠如（例えば,「自分の人生にとって大切な人は本当に誰もいない」）で特徴づけられる，個人のひきこもり特性を測定する指標を開発した。こうした指標を用いて，例えば，ひきこもり特性を持つ青年がスマートフォンおよびインターネットへの依存を示しやすいことなどが明らかにされている（Tateno et al., 2019）。

ひきこもりは，青年期に特に重要な問題である。これまで確認されたひきこもり事例では，青年期または若年成人期に初めてのひきこもり症状を示す場合が多かった（例えば，Koyama et al., 2010）。日本では，学業的な成功（例えば，優れた学業成績）がその後のキャリアの成功に強く結びついており，一度失敗するとその後の成功が難しいため，青年とその親は学業的成功への強いプレッシャーを感じている（Furlong, 2008）。また，過去数十年における日本の経済不況，非正規雇用の増加，終身雇用制度の崩壊などの理由によって（Brinton, 2011），学校から社会へ順調に移行することはさらに難しくなっている。こうした社会の状況を背景として，学業や社会との関わりに困難を感じた青年が社会から撤退すると考えられている（Furlong, 2008）。したがって，ひきこもりは青年が発達過程において陥りやすい注目すべきつまずきであり，学校におけるひきこもり特性を持つ青年に対する生徒指導・進路指導は重要と考えられる。

ひきこもりとキャリア選択

ひきこもり特性を持つ青年は，社会から撤退するため，社会参加を見据えて自身の長期的なキャリアを選択する段階において特に問題を生じると考えられる。青年のキャリア選択には様々な要因が関わっているが（安達，2001），その中でも本研究では，キャリア選択を成功裡に進めるために役立つ要因である，キャリア探索，キャリア選択に対する結果期待，キャリア探索意図の３つに着目する。第一に，キャリア探索とは，説明会に参加して職業に関する情報収集を行ったり（環境探索），自分自身の将来の進路や職業適性についてじっくり考えたりする（自己探索）行動である（安達，2008）。環境および自己に対するキャリア探索は，キャリア選択を現実的に進めるために有効な行動である（Stumpf et al., 1983）。第二に，キャリア選択に対する結果期待は，自身のキャリア選択が好ましい結果に結びつくと期待する意識である（Betz & Voyten, 1997）。キャリア期待が高いほど，キャリア選択に関する前向きな行動が促進されると想定される（安達，2001）。第三に，キャリア探索意図は，キャリア選択を進めるための行動を計画・立案し，実際に行おうとする意図である（Betz & Voyten, 1997）。キャリア選択を計画的かつ着実に進めていくために役立つと想定される（Lent, Brown, & Hackett, 1994）。

先行研究の結果からは，ひきこもり特性を持つ青年がキャリア探索を行いにくく，キャリア期待およびキャリア探索意図が希薄であると予想される。例えば，ひきこもりの青年は，自分のやりたいことを仕事にしたい意識が低く，人生で大事なことを自己決定することへの不安が高い（渡部他，2010）。そのため，自身のキャリア選択に期待を抱きにくく，計画を立てて積極的なキャリア探索行動を行うことは少ないと考えられる。また，ひきこもりへの親和性が高い青年は，アイデンティティの形成に困難を抱えやすく（Hihara, Ishibashi, Umemura, & Sugimura, 2020），社会的に望ましくない内容のアイデンティティを形成すること

もある（否定的アイデンティティ；Hihara, Sugimura, Umemura, Iwasa, & Syed, 2021）。アイデンティティは，青年期以降の様々な重要な選択（例えば，キャリア選択，パートナー選択，子どもを持つかどうかの選択）を主導していく指針となる（Montgomery, Hernandez, & Ferrer-Wreder, 2008）。ひきこもり特性を持つ青年は，キャリア選択に対する主導性を欠いているため，自身のキャリア選択について積極的に計画して探索することは少なく，キャリア選択の結果が自身にとって良いものになるという期待も持ちにくいと考えられる。実際に，否定的アイデンティティを有する青年が環境探索を行いにくく，職業未決定の状態を示しやすいことが明らかにされている（日原・杉村，2017）。

以上のように，ひきこもり特性を持つ青年はキャリア選択の多様な側面（キャリア探索，キャリア期待，キャリア探索意図）に困難を抱えると想定されるが，この関連性を直接的に検討した先行研究は存在しない。学校から社会への移行過程にひきこもりの様々なリスク要因が存在する現代日本において（Brinton, 2011; Furlong, 2008），ひきこもり特性を持つ青年がその後の社会参加の核となるキャリア選択に持つ困難を理解することは重要である。この点を明らかにすることによって，青年のキャリア選択を支援するための生徒・進路指導への示唆を得ることができると考えられる。

目的と仮説

本研究では，日本の青年におけるひきこもり特性とキャリア選択に関する指標（キャリア探索，キャリア期待，キャリア探索意図）の関連を検討することを目的とした。青年がキャリアについて意識していると想定される，就職活動時期に着目した。具体的には，卒業後に就職（正規雇用と非正規雇用を含む）を希望している４年制大学の３年次生を研究対象者とした。

ひきこもり特性を持つ青年は，キャリア探索，キャリア期待，キャリア探索意図において低い得点を示すと考えられる。したがって，ひきこもり特性とキャリア選択に関する指標との間には，いずれも負の関連が見られると予測した。

方法

対象者

日本の４年制大学に所属する，日本人の大学生３年次生756名であった。全ての対象者は，大学卒業後に就職（正規雇用と非正規雇用を含む）することを希望していた。年齢範囲は20歳から22歳であった（平均年齢は20.9歳，SD = 0.6）。男性は159名（21.0％），女性は597名（79.0％）であった。居住地域と両親の学歴には多様性があった。具体的には，対象者のうち573名（75.8％）が都市部（関東地方, 中部地方, 近畿地方）に居住しており，183名（24.2％）が地方（北海道，東北地方，中国地方，四国地方，九州地方）に居住していた。また，対象者の父親のうち466名（61.6％），母親のうち490名（64.7％）が高等教育機関を修了していた。一方で，対象者の父親のうち232名（30.7％），母親のうち229名（30.3％）が中等教育機関を修了していた。

手続き

オンライン調査会社であるマイボイスコム株式会社（https://www.myvoice.co.jp/）の登録者に対して，2019年11月にオンライン上で質問紙への回答を求めた。参加者に対して，（１）研究結果に影響しない程度での目的の説明，（２）研究への参加は強制ではなく自由意思によること，（３）調査のどの段階においても自由に参加を止めることができること，（４）データは統計的に処理され，個人情報が特定される形で公開されることはないこと，（５）参加を拒否しても教育上・学業上の不利益は生じないことを明示した。以上をオンライン画面上で表示し，参加へ同意した者のみが調査に回答した。本研究は，広島大学大学院人間社会科学研究科の倫理審査に承認された。本調査で使用したデータ，質問紙，分析コードは，Open Science Framework（OSF）のホームページにおいて公開されている（https://osf.io/m7q36/）。

質問紙構成

ひきこもり特性　The 25-items Hikikomori Questionnaire の日本語版 25 項目（Teo et al., 2018）を使用した（項目例：自分の部屋に閉じこもる）。“１．あてはまらない”から“５．あてはまる”の５件法で回答を求めた。回答の内的一貫性は高かった（α = .93）。

キャリア探索　Career Exploration Survey（Stumpf et al., 1983）の日本語版尺度（安達，2001）のうち，環境探索と自己探索の下位尺度を使用した。環境探索は７項目（項目例：就職セミナーや企業説明会に参加する），自己探索は５項目（項目例：これまで自分が行ってきた事と将来の職業について新しい関連づけをしてみる）であった。“１．まったく行わなかった”から“５．非常によく行った”の５件法で回答を求めた。回答の内的一貫性は，環境探索（α = .89）と自己探索（α = .90）の両方で高かった。

キャリア期待　Betz & Voyten（1997）で使用された，キャリア選択に対する結果期待を測定する４項目の日本語版（安達，2001）を用いた（項目例：仕事に

ついていろいろと勉強すれば，よりよい職業選択ができるだろう)。“1．全くあてはまらない”から“5．非常にあてはまる”の5件法で回答を求めた。回答の内的一貫性は高かった（α = .88)。

キャリア探索意図　Betz & Voyten（1997）で用いられた5項目の日本語版（安達 , 2001）を使用した（項目例：多くの時間を割いてじっくりと職業について考えるつもりだ)。“1．全くあてはまらない”から“5．非常にあてはまる”の5件法で回答を求めた。回答の内的一貫性は高かった（α = .82)。

結果

記述統計

各指標の平均値と標準偏差を Table 1 に示す。分析には，SPSS Ver. 24（Arbuckle, 2016）を用いた。予備的分析として，各指標とデモグラフィック変数（性別，年齢，居住地域，父親の学歴，母親の学歴）との関連を検討した。その結果，男性は女性よりも高いひきこもり特性（t (754) = 1.99, p = .047, Cohen の d = 0.18)，および低い環境探索（t (754) = 2.30, p = .022, d = 0.21）を示した。また，年齢が高い対象者ほど高い環境探索を示した（r = .09, p = .015, 95%信頼区間 = [.02, .16])。さらに，父親が高等教育機関を修了している対象者は，そうでない対象者よりも，高い環境探索（t (696) = 3.13, p = .002, d = 0.25)，自己探索（t (696) = 2.20, p = .028, d = 0.18)，キャリア探索意図（t (696) = 1.99, p = .047, d = 0.16）を示した。一方で，母親が高等教育機関を修了している対象者は，そうでない対象者よりも，高い環境探索（t (717) = 2.37, p = .018, d = 0.19）を示した。

Table 1

Descriptive Statistics for the Study Variables

Variables	*M*	*SD*
Hikikomori trait	1.66	0.7
Environment exploration	3.16	0.89
Self exploration	3.23	0.93
Career expectation	3.69	0.81
Career intention	3.45	0.76

Note. *M* = Mean; *SD* = Standard deviation.

ひきこもり特性とキャリア選択の関連

ひきこもり特性とキャリア選択に関する変数との関連を検討するために，相関分析を行った（Table 2)。結果は本研究の仮説を支持し，ひきこもり特性と環境探索，自己探索，キャリア期待，キャリア探索意図の間には，いずれも負の相関がみられた。

この関連性についてさらに詳細に検討するために，デモグラフィック変数を統制したうえでのひきこもり特性とキャリア選択に関する指標との関連を，パス解析によって検討した。Figure 1 に示すように，説明変数としてひきこもり特性を，目的変数としてキャリア選択に関する指標（環境探索，自己探索，キャリア選択に対する結果期待，キャリア探索意図）を投入した。また，統制変数としてデモグラフィック変数を投

Table 2

Bivariate Correlations Between Hikikomori Trait and Career Variables

Variables	Estimation	2	3	4	5
1. Hikikomori trait	*r*	-.19***	-.22***	-.25***	-.27***
	95%CI	[-.26, -.12]	[-.28, -.14]	[-.32, -.19]	[-.34, -.21]
2. Environment exploration	*r*	—	.73***	.43***	.56***
	95%CI	—	[.70, .77]	[.37, .49]	[.51, .61]
3. Self exploration	*r*		—	.42***	.54***
	95%CI		—	[.36, .48]	[.49, .59]
4. Career expectation	*r*			—	.72***
	95%CI			—	[.68, .75]
5. Career intention	*r*				—
	95%CI				—

Note. 95%CI = 95% confidence interval.

***p < .001.

入した。具体的には，性別（ダミー変数；0 = 男性，1 = 女性），年齢，居住地域（ダミー変数；0 = 地方，1 = 都市部），父親の学歴（ダミー変数；0 = 中等教育，1 = 高等教育），母親の学歴（ダミー変数；0 = 中等教育，1 = 高等教育）から各指標へのパスを想定した。さらに，目的変数の残差間に相関を仮定した。推定には，完全情報最尤推定法を使用した（Enders, 2010）。また，各指標について正規分布からのわずかな逸脱を補正するため，ロバスト標準誤差を用いた推定を行った（Satorra & Bentler, 2001）。Mplus Ver. 8.3（Muthén & Muthén, 1998–2017）を使用して分析した。飽和モデルのため，モデルの適合度は算出されなかった。

標準化したパス係数と95%信頼区間を Table 3 に示す。相関分析の結果と一貫して，ひきこもり特性は，環境探索，自己探索，キャリア期待，キャリア探索意図と負に関連しており，本研究の仮説を支持した。

考察

社会から撤退し自宅に閉じこもるひきこもりは，青年が発達過程において示す可能性のある，注目すべき問題である（Kato et al., 2019; 内閣府，2020）。先行研究では，ひきこもり特性を持つ青年は自分のやりたいことを仕事にする意識が低く，自己決定への不安が強いことが示されてきた（渡部他，2010）。また，ひきこもりへの親和性が高い青年が，キャリア選択をはじめとする人生の選択を主導する指針になる，アイデンティティの発達につまずくことも示されてきた（Hihara et al., 2020; Hihara et al., 2021）。しかし，ひきこもり特性とキャリア選択に関する諸要因の関連性を直接的に検討した先行研究は存在しなかった。この欠点を克服するために，本研究では，就職活動に取り組んでいる青年におけるひきこもり特性とキャリア選択に関する指標の関連を検討した。具体的には，キャ

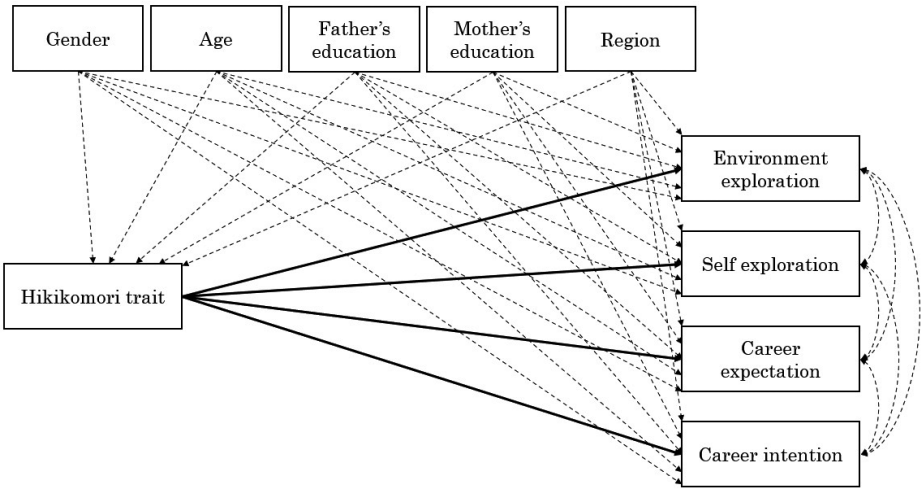

Figure 1. Estimated model of path analysis. For the sake of clarity, residual correlation and paths from control variables are presented in dotted line.

Table 3

Standardized Path Coefficients of Hikikomori Trait to Career Variables

Objective variables	β	95%CI	R^2
Environment exploration	-.16***	[-.31, -.10]	.06**
Self exploration	-.19***	[-.35, -.13]	.05**
Career expectation	-.24***	[-.38, -.18]	.07**
Career intention	-.25***	[-.36, -.18]	.07**

Note. β = Standardized path coefficient; 95%CI = 95% confidence interval.
**p < .01, ***p < .001.

リア選択を順調に進めるために役立つ要因である，キャリア探索，キャリア選択に対する結果期待，キャリア探索意図の３つに着目した（Betz & Voyten, 1997; Stumpf et al., 1987）。

ひきこもり特性とキャリア選択の指標との関連について，ひきこもり特性が高い青年ほど，キャリア探索の環境探索と自己探索，キャリア期待，キャリア探索意図について低い得点を示した。これらの結果は，本研究の仮説を支持している。つまり，ひきこもり特性を持つ青年は対人関係を回避し，社会から撤退するため，社会の中で自分に適したキャリアを形成することに困難を抱えると考えられる。現代の日本では，青年は学業的な成功への強いプレッシャーを感じ，経済不況等の理由から社会に参入する際の困難も多い（Brinton, 2011; Furlong, 2008）。こうした社会状況に置かれたひきこもり特性をもつ青年は，自身の適正とキャリア選択をどのように結びつければよいのかがわからず，競争の厳しい社会の中で自身のキャリア選択に沿って生きていく自信を持てずにいる（Suwa & Suzuki, 2013; 渡部他，2010）。そのために，自身のキャリア選択が成功するという期待を抱きにくく，計画を立ててキャリア探索行動に積極的に取り組むことは少ないと考えられる。重要な点として，以上の関連性は，青年の性別や年齢，居住地域，両親の学歴を統制しても確認された。つまり，本研究で得られたひきこもり特性とキャリア選択の指標との関連性が，デモグラフィック的特徴の偏りを考慮したうえでも，青年にある程度共通して確認されることを示唆する。

生徒・進路指導への示唆

本研究の結果は，青年のキャリア選択を支援するための生徒・進路指導について，重要な示唆を与えると考えられる。まず，ひきこもり特性を持つ青年を対象とする支援の重要性が示された。これまで，ひきこもりに対する就労支援では，すでにひきこもりが長期化している青年・成人への支援が強調されてきた（例えば，Kato et al., 2019; 厚生労働省，2010）。具体的には，ひきこもりが長期化している事例において，支援によって社会参加・就労への意欲がある程度高まってきた段階で，ハローワークや地域若者サポートステーション等の支援機関と連携して就労支援を行うことが想定されてきた。その一方で，本研究では，ひきこもり特性を持つ青年であってもキャリア選択に問題を抱えることが示唆された。６ヵ月以上ひきこもっていないひきこもり特性を持つ青年は数多く存在する（Teo et al., 2018; 渡部他，2010）。本研究は，ひきこもりに着目したキャリア選択の支援の対象を広げることの必要性を，実証的なデータに基づいて示した。

では，ひきこもり特性を持つ青年のキャリア選択を支援する有効な生徒・進路指導のあり方は何であろうか。長年のあいだ，キャリア教育では，求人情報の公開や面接指導など実践的な支援が強調されてきた。近年ではさらに進んで，キャリア選択と個人の生き方・働き方を結びつける試みが行われている（安達，2004）。ひきこもり特性を持つ青年が，キャリア探索を避けるだけでなく，自身のキャリア選択に対して期待を失い無計画になっているという本研究の結果は，彼らに対して単なる実践的な支援だけでは不十分であることを示唆している。むしろ，個人の人生全体を考えながらキャリア構築を支援する近年のアプローチを，さらに洗練させることが必要と考えられる。

具体的には，ひきこもり特性をもつ青年のアイデンティティ発達を助ける支援が有効かもしれない。ひきこもりに親和性を持つ青年は，人生の指針となるアイデンティティを明確にできず，社会に受け入れられるアイデンティティの発達に困難を抱える（Hihara et al., 2020; Hihara et al., 2021）。アイデンティティ発達を支援する方法として，小集団での会話によって自己理解およびアイデンティティの探求活動を促進するアプローチの有用性が示唆されている（Meca et al., 2014; Sugimura, Gmelin, van der Gaag, & Kunnen, 2021）。初期のひきこもりの兆候は周囲からはわかりにくいため（厚生労働省，2010），特定の青年への個別の支援よりも，集団への支援の方が適していると考えられる。したがって，前述のようなアイデンティティの発達を支援する方法を取り入れたキャリア教育プログラムの開発を行い，ひきこもり特性を持つ青年に対して効果があるのかどうかを検討していく必要がある。これによって，ひきこもり特性を持つ青年のキャリア選択を支える生徒・進路指導を促進でき，彼らの社会参加を支援することに資すると期待される。

本研究の限界と今後の展望

以下に，本研究の限界点と今後の展望を３点挙げる。第一に，本研究では，全ての指標について自己報告式の質問紙法を用いて測定を行った。ひきこもり特性とキャリア選択に関する指標との間には有意な相関がみられたが，この結果は，同様の自己報告による方法を使用したことによって得られた可能性がある。また，本研究でひきこもり特性を持つとみなされた青年が，実際にどの程度ひきこもっているのかはわからない。今後は，他者による行動評定を用いるなど（例えば，何ヵ月自宅に閉じこもっているのか，就職に関するセミナーに何度参加したのか），客観的な方法を取り入れていくことが有効である。

第二に，本研究の対象者は，卒業後に就職すること

を希望している，４年制大学の３年次生のみであった。高校卒業後に高等教育機関に進学する青年は82.8％であり，その中でも大学に進学する青年は53.7％である（文部科学省，2020）。今後の研究では，他の高等教育機関に所属する青年や，就学をしていない青年，高校生や中学生も対象に含め，本研究の結果が再現されるかどうか確認することが必要である。

第三に，本研究では日本人のみを対象としていたが，近年，ひきこもりは世界の多様な地域で報告されている（Lee et al., 2013; Ovejero et al., 2014）。ひきこもりが，個人のメンタルヘルスだけでなく労働力不足などの社会的問題にもつながることをふまえると（Kato et al., 2019），今後は様々な国においてひきこもりが重要な問題になると予想される。この点をふまえて，日本以外の国の青年を対象として検討を行っていくことが必要と考えられる。

結論

本研究は，ひきこもり特性を持つ青年が抱える困難についての学術的知見を拡張するとともに，生徒・進路指導に関する実践的示唆を提供した。具体的には，ひきこもり経験を持つ青年が自身のキャリア選択に期待を持ちにくく，計画に基づいてキャリア探索を行いにくいことを明らかにした。また，従来は長期のひきこもり者を対象として社会参加のためのキャリア支援が行われることが多かったが，ひきこもり特性を持つ青年までその対象を拡大することの必要性を強調した。ひきこもり特性を持つ青年に対する生徒・進路指導としては，青年のキャリアを自身の人生（アイデンティティ）と結び付けることを促す指導を，学校現場において集団に対して行うことが有効と考えられる。

付記

本研究は，筆頭著者に対する科学研究費補助金（特別研究員奨励費，課題番号18J12411）の助成を受けて行われた。

利益相反に関する情報開示

本研究について開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

安達 智子（2001）．大学生の進路発達過程：社会・認知的進路理論からの検討　教育心理学研究，*49*，326–336.

安達 智子（2004）．大学生のキャリア選択：その心理的背景と支援　日本労働研究雑誌，*46*，27–37.

安達 智子（2008）．女子学生のキャリア意識：就業動機，キャリア探索との関連　心理学研究，*79*，27–34.

Arbuckle, J. L. (2016). *SPSS AMOS24 user's guide*. Chicago, IL: SPSS Inc.

Betz, N. E., & Voyten, K. K. (1997). Efficacy and outcome expectations influence career exploration and decidedness. *The Career Development Quarterly*, *46*, 179–189.

Brinton, M. C. (2011). *Lost in transition: Youth, work, and instability in postindustrial Japan*. New York, NY: Cambridge University Press.

Enders, C. K. (2010). *Applied missing data analysis*. New York, NY: Guilford Press.

Furlong, A. (2008). The Japanese hikikomori phenomenon: Acute social withdrawal among young people. *The Sociological Review*, *56*, 309–325.

Hihara, S., Ishibashi, I., Umemura, T., & Sugimura, K. (2020). Roles of configurations of multiple identity domains in adaptive and maladaptive functioning in Japanese emerging adults: Using a culturally relevant index. *Emerging Adulthood*, *8*, 373–381.

日原 尚吾・杉村 和美（2017）．20答法を用いた青年の否定的アイデンティティの検討：量的・質的データによる分析　発達心理学研究，*28*，84–95.

Hihara, S., Sugimura, K., Umemura, T., Iwasa, Y., & Syed, M. (2021). Positive and negative valences of identities: Longitudinal associations of identity content valences with adaptive and maladaptive functioning among Japanese young adults. *Development and Psychopathology*, Advance online publication. https://doi.org/10.1017/S0954579421000043

Kato, T. A., Kanba, S., & Teo, A. R. (2019). Hikikomori: Multidimensional understanding, assessment, and future international perspectives. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, *73*, 427–440.

Kato, T. A., Kanba, S., & Teo, A. R. (2020). Defining pathological social withdrawal: Proposed diagnostic criteria for hikikomori. *World Psychiatry*, *19*, 116–117.

厚生労働省（2010）．ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン　厚生労働省 Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000006i6f.html（2021年８月28日）

Koyama, A., Miyake, Y., Kawakami, N., Tsuchiya, M.,

Tachimori, H., & Takeshima, T. (2010). Lifetime prevalence, psychiatric comorbidity and demographic correlates of "hikikomori" in a community population in Japan. *Psychiatry Research*, *176*, 69–74.

Lee, Y. S., Lee, J. Y., Choi, T. Y., & Choi, J. T. (2013). Home visitation program for detecting, evaluating and treating socially withdrawn youth in Korea. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, *67*, 193–202.

Lent, R. W., Brown, S. D., & Hackett, G. (1994). Toward a unifying social cognitive theory of career and academic interest, choice, and performance. *Journal of Vocational Behavior*, *45*, 79–122.

Meca, A., Eichas, K., Quintana, S., Maximin, B. M., Ritchie, R. A., Madrazo, V. L., Harari, G. H., & Kurtines, W. M. (2014). Reducing identity distress: Results of an identity intervention for emerging adults. *Identity*, *14*, 312–331.

文部科学省(2020). 大学入学者等の推移　文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20201126-mxt_daigakuc02-000011142_9.pdf (2021年８月28日)

Montgomery, M. J., Hernandez, L., & Ferrer-Wreder, L. (2008). Identity development and intervention studies: The right time for a marriage? *Identity*, *8*, 173–182.

Muthén, L. K., & Muthén, B. O. (1998–2017). *Mplus User's Guide* (8th ed.). Los Angeles, CA: Muthén & Muthén.

内閣府 (2016). 若者の生活に関する調査報告書　内閣府 Retrieved from https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/h27/pdf-index.html (2021年８月28日)

内閣府 (2020). 令和３年版子供・若者白書　内閣府 Retrieved from https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r03honpen/pdf_index.html (2021年８月28日)

Ovejero, S., Caro-Cañizares, I., León-Martínez, V., & Baca-Garcia, E. (2014). Prolonged social withdrawal disorder: A hikikomori case in Spain. *International Journal of Social Psychiatry*, *60*, 562–565.

Satorra, A., & Bentler, P. M. (2001). A scaled difference chi-square test statistic for moment structure analysis. *Psychometrika*, *66*, 507–514.

Stumpf, S. A., Colarelli, S. M., & Hartman, K. (1983). Development of the career exploration survey (CES). *Journal of Vocational Behavior*, *22*, 191–226.

Sugimura, K., Gmelin, J. H., van der Gaag, M. A. E., & Kunnen, S. (2021). Exploring exploration: Identity exploration in real-time interactions among peers. *Identity*, Advance online publication. https://doi.org/10.1080/15283488.2021.1947819

Suwa, M., & Suzuki, K. (2013). The phenomenon of "hikikomori" (social withdrawal) and the socio-cultural situation in Japan today. *Journal of Psychopathology*, *19*, 191–198.

Tateno, M., Teo, A. R., Ukai, W., Kanazawa, J., Katsuki, R., Kubo, H., & Kato, T. A. (2019). Internet addiction, smartphone addiction, and hikikomori trait in Japanese young adult: Social isolation and social network. *Frontiers in Psychiatry*, *10*, 455. https://doi.org/10.3389/fpsyt.2019.00455

Teo, A. R., Chen, J. I., Kubo, H., Katsuki, R., Sato-Kasai, M., Shimokawa, N., ...Kato, T. A. (2018). Development and validation of the 25-item Hikikomori Questionnaire (HQ-25). *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, *72*, 780–788.

渡部 麻美・松井 豊・高塚 雄介 (2010). ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討　心理学研究, *81*, 478–484.